

私が中学校に上がったばかりの頃、あるおばさんが私に聞いた。

「将来もしあなたが社長になったら、会社に新しく入った女の子がいたら、どう接する？」

私は覚えている、自分の答えを。

「あの子が私にすごく良くしてくれるなら、私の好きなものを全部買ってくれて、お金を全部私に使わせて、私が苛めても逆らわないで、私がお腹すいたらご飯を作ってくれて、喉が渴いたら水を注いでくれるとか。それで、社員って仕事しなきゃいけないんでしょ？ よくわからないけど、するならちゃんとやらなきゃね。」

おばさんは堪えきれずに笑いながら言った。

「それは彼氏の話でしょ。私は社員の話をしているのよ。」

私は頷いて、当たり前のように答えた。

「そうだよ、私の社員なんだから、私に良くして当然でしょ？ 最近習った四字熟語があるんだ、『舐痔結驪』って言うんだけど、悪いことだって習った。でも、私の社員なら当然私におべっか使って、私の痔を舐めたりするのもやるよね。お姉ちゃんがこの前痔ですごく辛そうだったから、私が将来同じ病気になったら、社員にやらせようと思う。」

「でも、そんなのすごく人を辱めることだと思わない？」

おばさんが聞いた。その時の口調は、もう中学生相手に話している感じではなかった。

私は答えた。

「思わないよ。ただの例え話だもん。私、そんな病気にならないし。」

その後おばさんは何も言わなくなった。ただ「そんなのは良くない、人と人は平等なのよ」と教えてくれた。私は無視した。

やがて私は成長し、大学を卒業して社会人になり、気付けば会社で重役の地位にまで上り詰めていた。小さい頃に言ったこの言葉を時々思い出すと、つい笑ってしまう。あの頃の私は本当に可愛かったな、と。

そんなことを考えながらぼんやりしていると、一人の少女が私の机の向かいに立った。

「麗質さん.....来ました.....」

少女は蚊の鳴くような小さな声で言った。俯いたまま、私の目を見ようとし
ない。上半身はカートゥーン柄のパーカーで、その裾をぎゅっと握りしめてく
ちやくちやにしていた。

「田文心よね？ ウェブサイトの完成品、もう三日も経ってるのにまだ出来
てない。周經理があなたに任せたって言ってたけど、どういうこと？ まだや
れるの？」

私は彼女を一瞥もせず、足を組んでスマホをいじりながら言った。

少女は無言のままだった。しばらく待っても返事がないので、少し苛立って
きた。私は顔を上げて彼女を見た。彼女の顔はすでに涙でぐしゃぐしゃで、ぽ
ろぽろと大粒の涙が止まらず落ち続け、目が真っ赤に腫れ、鼻をすすりなが
ら両手がびしょびしょになっていた。

私は苛立ちを抑えきれずに言った。田文心はとても綺麗で若く、大学を卒業
したばかりで、私が自らサインして採用した子だった。まさか仕事がこんな
にできないとは。作業自体は難しくない、ただ時間がかかるだけなのに、それ
すら満足にできないなんて。

私は冷たく言った。

「泣いてる暇があるなら、仕事をちゃんとやりなさい。他に何か言いたい
ことある？」

田文心はますます激しく泣き出し、必死に首を横に振った。

「人事に行って退職手続きをしなさい。」

私は失望した様子で言った。

田文心は「わっ」と声を上げて泣き崩れ、泣きながら悔しそうに言った。

「麗質さん、ごめんなさい.....もう二日二晩徹夜したんですけど、どう
しても終わらなくて.....麗質さんの信頼を裏切ってしまって、本当にご
めんなさい.....すぐ手続きに行きます.....」

それを聞いて私はすぐに違和感を覚えた。建品の作業は量が多いとはいえ、
集中してやれば一日プラス半日もあれば終わるはずだ。たとえサボったとし
ても二日で十分終わる。これじゃ単なる能力の問題じゃない。

「じゃあ、どうして終わらないの？ どういうこと？」

田文心はやはり首を横に振ったまま、無言だった。それから涙を拭いて私
に一礼し、「私、行きますね、麗質さん」と言った。

私は呼び止めた。

「ちょっと待ちなさい。」

田文心は足を止め、その場に立ったまま、「麗質さん、他にご用ですか？」と聞いた。

この子は顔が薄いとわかっていたので、私は少しだけ表情を和らげ、辛抱強く尋ねた。

「あなたが建品を作るのに、一つ作るのにどれくらいかかるの？」

「だいたい二十分くらいです……」

私は眉をひそめた。建品なんて普通は一、二分で一つ作れる。会社の清掃のおばさんに頼んでも三分とかからないはずだ。明らかに大問題だ。

私は手招きして彼女を近くに寄せ、自分のノートパソコンを彼女の前に押し出して言った。

「今ここで建品を作ってみなさい。適当に一つアップロードすればいいから、私が見るわ。」

田文心は頷いて操作を始めた。私はすぐに彼女が遅い理由がわかった。

建品は通常、資料をアップロードするだけで済む。すべての材料はすでに揃っているはずなのに、田文心は画像を探すところから始めていた。

画像を探す→画像を修正する→メーカーへパラメータを問い合わせる→社内各地の社員の連絡先から工号を抽出→権限開放ウィンドウを設定……これらを全部やってからやっとバックエンドで建品を作成する。

この作業量では、二十分どころか一時間に一つ作れたら上出来だ。私は手を振って言った。

「もういいわ。戻りなさい。離職手続きは急がなくていいから、通知を待ちなさい。」

田文心は立ち上がり、もう一度深くお辞儀をした。「はい、麗質さん。」

田文心が去った後、私は彼女の上司である周經理を呼び、関係する社員数人に事情を聞いた。そして退勤間近になって、周經理を連れて田文心の席の近くへ行った。

「麗質さん、周經理……」

田文心が慌てて立ち上がった。

私は田文心の椅子を引き寄せて腰を下ろし、足を組んで言った。

「周佩、説明しなさい。」

周佩は総務部の副経理で、田文心の直属の上司だった。四十代後半の太っていて醜い女で、顔中に皺が寄り、普段からあまり魅力のない女だった。しかし今は顔が腫れ上がり、特に両頬がひどく、透明感すらあって血の色が透けて見えるほどだった。彼女は低い声で田文心に言った。

「小田.....あなたの建品の仕事は本来そういうやり方じゃないの。実は私が意図的に作業量を数十倍に水増ししたの。ごめんなさい。」

田文心は呆然とした。その頃には周囲の同僚たちも立ち上がり、静かにこちらを見ていた。

私は机を軽く叩いて言った。

「それが謝罪の態度？」

周佩の体がびくりと震え、「どすん」と音を立てて田文心の前に膝をついた。

「小田.....本当にごめんなさい.....」

私は田文心の方を見て、首を傾げて合図した。次はお前の番よ、と。

田文心は完全に動揺し、周佩と私を交互に見つめ、目が再び赤くなった。首を横に振って何も言わない。

この子は本当に内気すぎる。任せたらこのまま終わってしまうとわかっていた私は、立ち上がって周佩の横に近づき、冷たい声で命じた。

「伏せなさい。」

周佩は全身を震わせ、両手を何度も開いたり閉じたりした。十秒近くも逡巡した末に、結局私の意に逆らえず、前に倒れ込むようにして田文心の足元に跪伏した。

私は一歩前に踏み出し、左足のハイヒールで周佩の手を踏みつけた。周佩は「うっ」と小さく悲鳴を上げ、すぐに歯を食いしばって耐えた。私は高く右足を振り上げ、9センチの赤いソールを持つ漆皮ハイヒールを周佩の頭に落とし、力強く踏み下ろした。

「ううう.....」

周佩は泣き声を漏らしたが、微塵も抵抗しようとはせず、大人しく私の足に頭を踏まれながら床のカーペットに押しつけられた。私はこの姿勢を保ったまま、周囲の社員たちに向かって言った。

「みんなに発表するわ。周経理は私的な理由により、明日から会社を退職する。小田が行政部の副経理に就任する。」

同僚たちの間でひそひそと囁きが広がった。私は手を振って言った。

「用事がない人は退勤しなさい。用事がある人は仕事を続けなさい。見るんじゃない。」

それから私は足を上げた。周佩の頭がすぐに私の足に合わせて持ち上がる。私は言った。

「謝りなさい。」

「小田、ごめんなさい.....」

「パン！」という鈍い音とともに、周佩の頭が再び私の足で踏みつけられ、カーペットに強く叩きつけられた。

再び足を上げ.....

周佩は腕を突いて頭を上げた。

私は続けた。

「謝りなさい。」

「小田、ごめんなさい.....」

「パン！」

「謝りなさい！」

「小田、ごめんなさい.....」

「パン！」

.....

十数回もの頭踏みつけの後、周佩は床にぐったりと崩れ落ち、動かなくなった。泣き腫らした顔はぐちゃぐちゃで、踏みつけられるたびにカーペットの埃がべっとり付着し、汚らしくて気持ち悪い、まるで太った豚のようだった。私は鼻を鳴らして足で軽く蹴り飛ばし、言った。

「さっさと滾げ。」

周佩は何も言わず、這うようにして這いずり回りながら逃げ去った。

私は呆然と見ていた田文心にようやく事情を説明した。実は周佩の夫が前回会社に来た時、田文心を一目見て気に入ってしまい、五十過ぎのろくでなしのクズ男が、どこからそんな自信が湧いたのか田文心にアプローチを始め、会社に三度も訪ねてきたらしい。ただその老人の表現がかなり遠回しだったので、田文心本人は気づいていなかったかもしれない。

しかし枕を共にしている周佩が気づかないはずがない。夫を叱るところか、田文心に嫌がらせをして追い出そうとした。彼女の心の中では、夫は田文心に誘惑されたのであり、夫に非はないというわけだ。

事情を知った私は鼻息が荒くなった。一家揃って馬鹿ばかりだ。あの小田は顔もスタイルも抜群、家柄も良く、性格も優しい。お前たち二人が束になっても小田の足の指一本にも及ばない価値もない。

私はこういうことが一番許せない。小田は私が自ら採用した子だというのに、こんな馬鹿げた理由で虐げられていた。私はその一家を皆殺しにしたいくらいだった。すぐに周佩をクビにした。

周佩は最初抵抗したが、私ははっきり告げた。あのお前の夫など、私が足の指を動かすだけで、犬のように這い寄ってきて私の靴底を舐め回すだろう。お前がまだ夫を欲しければ、大人しく会社から滾げ、と。

周佩は私の言葉が本当だと知っており、私の背後にある力関係にも逆らえず、最終的に私は彼女を徹底的に虐げ、惨めに追い出した。

田文心は私の話を聞き終えると、感極まって涙を拭いながら言った。

「これからは絶対に真面目に働きます。何でも麗質さんの言うことを聞きます。恩返しをさせてください……」

私は特に答えず、首を傾げて言った。

「もういいわ。この件はこれで終わり。片付けて退勤しなさい。明日は正装で来なさい。これからはあなたが行政部の副経理よ。」

そう言い残して、私は自分のオフィスに戻り、パソコンを開いて仕事を再開した。

午後は田文心の件で潰れてしまい、自分が溜めていた書類のチェックが山積みになっていた。

どれくらい時間が経ったのか、天はすっかり暗くなり、お腹が空き始めた。ふと時計を見ると、もう夜の九時過ぎだった。私はパソコンを閉じて明日続きをやりようと思い、立ち上がろうとしたその時、オフィスのドアをノックする音が響いた。

私はびっくりと驚き、この時間にまだ会社には誰がいるのかと、恐る恐る聞いた。

「誰？」

ドアの向こうから小田の声がした。

「麗質さん、入ってもいいですか？」

私はほっと息をついて言った。

「まだ帰ってなかったの？」

小田は湯気の立つコーヒークップを片手に、別の手で小さなケーキをいくつか持って入ってきた。

「麗質さんがまだ残ってるんだから、私も当然ですよ。麗質さんに夜食を買ってきました。熱いうちに食べてください。食べてからまた仕事してください。」

私は頷いて、物を机の上に置くよう指示し、コーヒを一口飲んだ。味は悪くない、下のビルの Luckin Coffee だろう。ケーキも私の好みに合っていた。

「あなたも食べなさい。」

小田は首を横に振り、私が美味しそうに食べるのを見て、幸せそうに満足げな笑みを浮かべ、私の後ろに回って肩を揉み始めた。

「私はお腹すいてないです。麗質さんが食べてるの見てるだけで幸せです。麗質さんの肩をほぐしてあげます。」

私は笑った。

「さすがうちの小田ね。かわいがった甲斐があったわ。」

田文心は少し得意げな口調で言った。

「これからはもっと麗質さんのために頑張ります。誰よりも麗質さんに尽くします。たとえ麗質さんの彼氏だって、私には敵わないですよ。」

私はくすくす笑いながら言った。

「今私に優しくしてくれるのは、両親とうちの犬だけよ。あんたはその犬の次ね。」

田文心は不服そうに言った。

「絶対に麗質さんの犬より上ですよ。」

私はからかった。

「無理無理。前三位は確定してるの。お父さん、お母さん、うちの犬。変えられないわ。」

田文心は少しむっとして言った。

「じゃあ私も麗質さんの犬になります。今の犬を三位から蹴落とします。」

私は思わず大笑いし、コーヒーを吹き出しそうになった。小田は本当に可愛い。

ケーキをもう少し食べ、私はパソコンを再び開けて、もう少しだけ仕事をしてから帰ることにした。もうお腹は空いていないし、帰っても特に用事もない。

田文心は肩を揉んでいた手を止め、私の横に回って今度は脚を揉み始めた。私は仕事着のままだった――白いブラウス、タイトスカート、肌色のストッキング、ハイヒールという標準的なオフィススタイルだ。脚を揉むと言うので、私は少し脚を開いて彼女に揉みやすい角度を作った。

何度か揉んだ後、私は振り返って見て、驚いた。田文心は両膝を床について、私の脚の横に跪いたまま脚を揉んでいた。

私は彼女の頭を撫でて言った。

「跪いてどうしたの？ 疲れたらもうやめなさい。姐は平気よ。」

田文心は首を横に振り、少し強情な表情で言った。

「姐は大丈夫です。仕事続けてください。私には構わないで。麗質さんをリラックスさせてあげます。」

私は首を傾げ、心の中で「まあいいか」と思った。実際、揉み心地はとても気持ち良かった。力は強くないので、本格的なマッサージというより愛撫に近いが、仕事中に強い刺激はいらない。ちょうどいい具合で、とても心地よい。

私は再びパソコンに向き直った。しばらくして、突然彼女がもう片方の脚を揉み始めたことに気づいた。おかしい、彼女が立ち上がるのを見ていないのに、どうやって移動した？ まさか私の脚の下を這って移動したのか？

私は両足で床を蹴り、椅子を後ろに滑らせ、低頭して田文心を見下ろした。

「這って移動したの？」

田文心は顔を赤らめて言った。

「麗質さんの邪魔をしたくなかったんです。それに.....麗質さんの脚の下、すごく綺麗ですよ。這うくらい何でもありません。」

私は笑った。

「これって私の股の下を通った屈辱ってことになるんじゃない？」

田文心は気まずそうに言葉を詰まらせ、しばらく沈黙した後、言った。

「麗質さんの.....麗質さんの股の下をくぐるのは、屈辱なんかじゃありません。私は.....私は.....麗質さんに.....お仕えするべきで.....その.....」

彼女がろれつが回らなくなってきたのを見て、私はますます面白くなった。

「じゃあ、もう一度钻ってみせなさい。」

田文心は顔を耳の根元まで真っ赤に染めたが、怒った様子は一切なく、むしろ私に媚びるような笑みを浮かべて言った。

「は、はい.....麗質さんが見たいなら、毎日でも钻ります。」

私は唇を湿らせ、彼女の言葉に少し心が動いた。頭の中で、田文心のような可憐で静かな女の子が、毎日犬のように私の足元を這い回る姿を想像し.....意外と受け入れられるかも、と思った。

田文心は床に伏せ、低く体を沈め、骨をきつく引き締め、私の視線の下で、脚の間の狭い隙間をくぐり抜けた。

私は少し興奮を覚え、わけもなく彼女を苛めたくなったが、すぐにその気持ちは消えた。

「もう一度這って戻りなさい。続きを揉みなさい。私まだ仕事があるわ。疲れたら休みなさい。」

田文心は二つ返事で再び這い戻り、私は笑いを堪えて深呼吸し、田文心のことを頭から追い出して書類に集中した。

さらに三十分ほど経った頃、脚が少し痺れてきた。田文心に合わせていたせいで脚を動かさず、血が止まっていたのだ。私は脚を上げ、足首を回し、虚空中で軽く蹴る動作をした。すると突然、足裏が硬いものに当たった。

私は一瞬固まり、身を乗り出して下を見た。田文心はすでに机の奥まで這い入り、額で私の靴底を支え、ヒールがちょうど彼女の唇に刺さっていた。

「何してるの？」

「麗質さん、長い時間お仕事で脚が疲れているはずです。私が脚台になります。低くしたい時は踏み下ろして、高くしたい時は脚を上げてください。私が調整します。」

私は呆れて笑うしかなかった。「どうして私にこんなに尽くすの？」

田文心は媚びるような声で答えた。

「当然のことです。私、まだ麗質さんに十分尽くせていません。それに.....麗質さんのお役に立てるだけで、私はとても幸せなんです。」

私は苦笑してため息をついた。

「もうこんなことしなくていいわ。私まで気まずくなってきた。」

田文心は慌てて言った。

「いいんです！ 私、やりたいんです。本当に。麗質さんがお疲れなのに、何もしてあげられないから.....少しでも楽にしてあげられたら、それだけで.....」

私は肩をすくめた。

「まあ、いいわ。じゃあ支えて。もう少し低く。」

そう言いながら足先を強く押しつけ、田文心の顔を踏み、五センチほど下げた。田文心は逃げなかった。この高さだと、彼女は全身を跪伏させながら顔を仰向け、私の靴底を受け止めていることになる。

その姿を想像して、私は思わず笑い出しそうになった。人にこんな屈辱的で辛い姿勢を取らせて、ただの脚台にする.....この支配感がたまらない。

私は抑えきれない微笑みを浮かべ、ふと思いついて言った。

「田文心、口を開けなさい。」

田文心は素直に口を開いた。私のヒールがそのまま彼女の口内に滑り込み、長く細いヒールが喉の奥まで突き刺さった。田文心は予想通りえずくような動きをした。私はヒールを引き抜こうとしたが、突然、硬くて柔らかいものがヒールを支え、くると巻きつき、再び安定して支えてくれた。まるでスポンジを踏んでいるような快適さだった。

すぐにわかった。それは田文心の舌だ。彼女は舌を輪っかに巻き、力を入れて硬くし、私のヒールを固定してくれていた。予想外の心地よさに、私はため息をついた。

本当に気持ちいい。小田はすごい。ただ、このやり方は度が過ぎるし、彼女もおかしい。私があんなに辱めているのに、怒るところか.....

まあ、私の足が気持ちよければそれでいい。私は彼女のことは放っておいた。

さらに数分間書類を見ていたが、私は脚を動かした。するとヒールを包んでいた舌が明らかに柔らかくなってきた。田文心がもう力尽きてきたのだろう。私は彼女にずっと舌を硬くさせ続けるのも可哀想になり、言った。

「田文心、ヒールを噛みなさい。」

田文心はすぐに従った。私は脚を引くとハイヒールが脱げ、脚を上げて田文心の頭を探り当て、下に強く踏みつけた。田文心の顔全体が床に押しつけられた。

田文心は落ちる瞬間に顔を少し横に向け、片方の頬を床に、もう片方を私の足に踏まれながらも、ハイヒールをしっかりと噛んだままだった。

私は今、積極的に田文心を苛めていた。心臓が少し速くなり、新鮮で刺激的な感覚に包まれた。足の下で田文心の顔は熱く火照り、足の裏がとても心地よく、柔らかくて踏んでも疲れない。

私は唇を湿らせ、もうこうなったなら徹底的に気持ちよくなろうと思った。

そう考えながら、もう片方の脚が勝手に動き、こちらの脚の上に乗上げ、二本の脚の全ての体重を田文心の顔に預けた。足首を回すと、ハイヒールが「ぱたん」と音を立てて足先から滑り落ち、ちょうど田文心の顔の横に落ち、鼻の上に引っかかった。

私はぼんやりと気づいたが、特に気にせず、下を見もしないまま、気持ちよさそうに「ん.....」と声を漏らし、書類を読み続けた。

私は快適だったが、田文心は惨めだった。机の下は非常に狭く、体をぎゅっと締めなければ私に邪魔にならないようにできない。頭の上に二本の脚を乗せられ、圧力が凄まじく、頭がぼんやりし、視界が暗くなった。最悪なのは、私の足は臭くないものの、一日中ストッキングとハイヒールを履いていたので、多少の匂いと革の臭いが混じり、田文心の鼻に容赦なく流れ込む。逃げようもなく、靴の口が彼女の鼻を完全に覆っていた。

幸い今回私が見ていた時間は長くなく、書類を全て終えた。時計を見ると 10 時 20 分だった。つまり、田文心を踏んで三十分以上経っていたことになる。

彼女を踏み壊してしまったのではないか？

私は少し申し訳ない気持ちになり、最初は少し遊ぶつもりだったのに、書類に夢中になって忘れていた。慌てて脚で床を蹴り、椅子を後ろに滑らせた。

しかしその時ちょうど田文心の顔を踏んでいたことを忘れていた。この一蹴りはかなり強く、田文心は「うあっ」と声を上げ、顔を床に擦りながら1センチほど滑った。私は急いで脚を縮め、宙に浮かせて言った。

「田文心、大丈夫？」

田文心は少し痛そうに答えた。

「大丈夫です.....麗質さん。」

私は「ああ」と返事し、「じゃあ靴を履かせなさい。仕事終わったから帰りましょう」と言った。

机の下でごそごそと動き、田文心が私のハイヒールを拾い、足に履かせた。私は床を踏んで調整し、二歩後ろに下がって立ち上がった。

田文心も這い出てきて、跪いたまま脚が痺れてふらふらと立ち上がった。私は彼女の顔を見て、思わず笑い出しそうになった。

今の田文心は、片方の顔が汚れて赤く、床に擦れたせいだ。もう片方の顔には、はっきりと足の裏の形がくっきり浮かんでいた。

私は少し近づいて、自分の足の酸っぱい臭いを嗅ぎ、ちょっと気持ち悪くなったが、田文心はそんなもの感じていないように顔を擦りながら言った。

「麗質さん、終わりましたか？ よかったです。」

私は彼女の頭を撫でた。

「うん、小田のおかげね。よくやったわ。」

田文心は子供のように嬉しそうに笑い、言った。

「これからも、麗質さんが残業する時は、こうやってお手伝いします。いいですか？」

私は肩をすくめた。彼女が気にしないなら私も構わない。

「いいわ。あなた次第よ。」

そう言いながら、田文心を連れて外へ向かった。

洗面間の前を通りかかった時、私は田文心に言った。

「ちょっと待ってて、トイレに行くわ。」

田文心は頷いた。私はトイレに入り、便座に座って尿を始めた。ふと足元のハイヒールを見て、昨夜の記憶が蘇った。昨日は外で飲酒し、店で和式トイレを使い、尿が跳ねてヒールにたくさんかかっていた。私はそのまま処理せず放置していた。田文心がさっき私のヒールを口に含んでいたということは.....昨日の私の尿を全部舐め取っていたということか？

私は胸に異様な感覚が広がるのを感じた。田文心は気づいていただろうか？
彼女は絶対に知らないはずだ。私の靴の尿垢を綺麗に掃除してしまったことも、私の下半身が少し湿って熱くなっていることも。

私は顔を赤らめ、突然強い衝動に駆られた。田文心と呼び入れて、私の尻を拭かせ、口と舌で下半身を綺麗に掃除させ、高潮させて、私の分泌物や愛液を全部食べさせ、最後に絶頂の瞬間に彼女の頭と顔に思いっきり尿を浴びせたい。

しかし結局私はその衝動を抑えた。もう十分苛めている。これ以上はやりすぎだ。小田はとても優しい子なのに、そんなことをしたらどうなるかわからない。

私は心のざわめきを抑え、裙を直してトイレを出た。田文心の顔を見て、つい聞いてしまった。

「私のヒールの味はどうだった？」

田文心は一瞬きょとんとして、言った。

「味なんてしませんでしたよ。」

私は思わず大笑いし、彼女を連れてビルを出た。

それからの数週間、私はおそらく蜜月期に入っていたのだろう。

田文心はあらゆる方法で私を喜ばせ、様々な工夫をして私に仕えてくれた。中には私でさえ恥ずかしくなるような方法もあったが、田文心は全く気にする様子もなく、自然にそうした行為をしてくれた。それが私をととても心地よくさせ、逆に彼女自身は辛いはずなのに。結果、私は毎日の出社時間が楽しみになるほどだった。

しかもこの子はとても気が利く。私の考えていることを先回りして察知し、準備してくれる。たとえば二週間前、彼女は突然プレゼントをくれた。開けてみると、とても綺麗な首輪で、犬用のリードが付いていた。田文心が私の前に跪き、頭を垂れて私に首輪を付けさせてくれた瞬間、私はまるで強い酒を半斤飲んだように酔った。

それ以来、私のオフィスに来ると、田文心は必ず自らリードを私の手に渡すようになった。例外はない。

またある時、私は風邪を引いてしまい、数日間とても辛かった。喉に痰が絡まって、時々吐き出さなければならず、自分でも面倒だった。しかしオフィスでは、最初の一回を除いて、田文心は毎回私が咳き込むと、次の瞬間にすでに綺麗に畳んだティッシュを差し出してくれていた。

極めつけは、ある日昼食と一緒に食べていた時、私が喉を動かしただけで、田文心は自分の飯碗を両手で捧げ、私の胸の前に差し出した。

私は大きな一口の濃い痰を田文心の飯碗に吐き入れ、彼女が頭を下げてそれを一口で吸い込むのを見た。

その瞬間、私は自分がとても高貴に感じた。

さらに、毎日私と至近距離で接し、私の痰まで食べているため、田文心は毎日大量の抗ウイルス薬を服用していた。医者に相談した上で何種類もの薬を混ぜて大量に飲んでいて。私は止めようとしたが、田文心は真剣に言った。彼女が倒れるわけにはいかない。私に仕える人がいなくなったら彼女の方が辛いから、と。

私は表面上は冷たく「そんなに仕えなくてもいい」と言い、彼女は私が彼女なしではやっていけないと思っているのか、と顔をしかめたが、心の中では密かに嬉しかった。時々、薬の副作用で田文心が汗だくになったり腹痛を起こしたりするのを見ると、不思議な満足感があった。正直.....嫌いではなかった。

「麗質さん、麗質さん。」

ドアの外から田文心の声が響き、私の思考を遮った。

「入りなさい。」

田文心はドアを押して入室し、まず私の机の中から鉄の鎖を取り出し、自分の首輪に繋いだ。そしてもう片方の端を私に差し出し、私に引かせてからようやく言った。

「麗質さん、ご依頼の資料はすべて送信済みです。またいくつかのパラメータを修正し、独立した新しい副本も生成して送信しました。ご確認をお願いします。」

私は田文心の仕事能力を完全に信頼していたので、頷いて言った。

「ええ、ご苦労様。一緒に会議に出なさい。」

午後に重要な会議があり、数社の経営陣と交渉する必要があったが、ビデオ会議なのでオフィス内で済む。

この会議はかなり重要で、私がプレゼンをするため、田文心に補助をさせていた。途中で問題が起きた場合、すぐに処理できるように。

一時間後、田文心はすべての機材を準備し終え、私は服装を整えて机の後ろに座り、カメラをオンにした。

「各位リーダー、こんにちは。今回の件について……」

私はカメラに向かって滑らかに話し、一つ一つの資料を広げ、整理した論理で説明を始めた。約三十分後にはすべての内容を話し終えた。

向こうの五人の社長が揃って頷き、二人が拍手をした。条項に非常に満足している様子だった。

私は微笑みを浮かべ、質問があれば今どうぞと促した。

その時、足元の田文心が小さな声で拍手しながら言った。

「麗質さん、すごいです！ 最高のお話でした！」

私は表情を変えずにいたが、口角が思わず少し上がった。小腿を軽く引いて狗鏈を引くと、田文心はすぐに伏せた。私は片足を上げ、彼女の頭を踏みつけた。

さっきのプレゼン中、実際には田文心はずっと私の足元に跪いていた。話す際に手を使う必要があったので狗鏈を引けず、足首に繋いでいたのだ。今は田文心の頭を踏み、数回軽く踏んで合図した――静かにしなさい、まだビデオ中よ。

田文心は私の意図を理解したようで、「くすくす」と小さく笑った。そしてこの小娘は突然頭を振って私の足を振り払い、二歩這って私の脚の下に入り、足首にキスをした。

私は薄いストッキングを履いていたので、とても敏感だった。彼女の唇は熱く、気持ちよかった。私はもう片方の脚を上げ、靴底で彼女の顔を軽く叩いた。

田文心は気持ちよさそうに私の靴底に頬を擦りつけ、数歩移動して私の正面に跪き、脚に沿って上に向かってキスを続けながら這い上がってきた。

私は画面の中の五人の社長を見ながら、心の中で思った――今は会議中なのに、田文心は何を邪魔しているんだろう。しかしその柔らかく甘い舌が這い上がってきた瞬間、私の心拍が速くなり始めた。唇を噛み、伸ばした手で田文心の頭を軽く叩いた。

田文心は首を縮めたが、退くことはなく、私が奥に座っているため股間までは届かず、せいぜい太もも周辺を舐め回すだけだった。それだけでも私はむずむずして気持ちよく、呼吸が思わず少し荒くなった。

ビデオ会議では相手の社長がまだ話し続けていたが、私は最初ほど集中できなくなっていた。一字一句は聞き取れていたものの、頭の回転が少し追いつかなくなっていた。苛立ちながら太ももで田文心の頭を挟み、脚を彼女の背中に乗せて押さえつけ、邪魔をさせないようにした。

田文心は私の圧力で少し苦しそうにしていたが、急に下へ引っ張り、頭を私の両脚の間から滑り落とした。私はストッキングを履いているし太ももは滑らかで、それほど強く押さええていなかったため、田文心は簡単に逃げてしまった。

私は田文心の腰を軽く踏み、ちゃんとしていなさいと合図した。このまま動かないだろうと思っていたのに、田文心は机の奥まで縮まり、頭で私の片方の脚を支え、もう片方の脚を手で掴んだ。

私は足を揉ませるつもりだろうと思い、放っておいた。ところが彼女は私のハイヒールを脱がせ、まず強く私の足の匂いを嗅ぎ、しばらくしてからストッキングの爪先を噛んで思い切り引き裂き始めた。

私はすぐにまずいと思ったが、避けるには遅すぎた。薄いストッキングが大きく引き裂かれ、五本の足指がすべて露わになった。次の瞬間、私の足指は田文心の口の中に落ちていた。

その温かい舌が私の親指の先端に絡みつき、爪の隙間に力強く押し込まれた。

私は全身を震わせ、首が硬直した。顔に痛みと快楽が混じった表情が浮かび、唇を強く噛んで声を出すまいと必死になった。

この小娘、彼女は私が一番敏感なのは爪の隙間だと知っていて、わざわざそこを攻めてくるなんて、私を困らせる気か？ 私は全身が痺れるような快感を必死に堪え、両足の指で田文心の舌を強く挟み込み、親指で彼女の上顎を思い切り搔いた。

「うういっ！」

田文心が奇妙な悲鳴を上げたが、幸い声は小さかった。私は苛立ち、彼女の舌を掴んで床に踏みつけ、同時にもう片方の足で頭を踏みつけ、ヒールで鼻翼を突き刺し、死ぬほど固定した。

「うううう……」

田文心が軽い抗議の声を上げ始め、痛みを帯びていた。私は無視して、足を彼女の口の中で乱暴に搔き回し、長く鋭い爪で上顎と舌をめちゃくちゃに搔き筆

った。田文心は口を閉じることも、私を噛むこともできず、痛みを堪えながら小さな声で哀願するしかなかった。

何度か搔いたが物足りなくなり、結局彼女の狗鏈を掴んで引き上げ、髪を掴んで一回転させ、仰向けに寝かせた。それから尻を上げ、彼女の頭を私の椅子の上に敷き、思い切り腰を下ろした。

この臭い小娘、息を止めて死ね！

田文心は意外と嬉しそうで、両手で私の太もものにしがみつき、ストッキングを擦りながら頭を捻って呼吸の隙間を作ろうとした。

私がそんな願いを叶えるはずがない。尻を捻りながら思い切り体重を乗せて座り込んだ。田文心は短く苦しげな呻きを漏らし、痛かったのだろう、腰を跳ねさせて起き上がろうとした。私はすぐに足を彼女の腹に踏みつけ、低い声で囁いた。

「手を下ろしなさい。動くなよ。もう一度触ったら、座り殺すわ！」

田文心の手がびくりと震え、慌てて下ろして椅子脚を掴んだが、息ができない状態が数秒で彼女を苦しめ始め、身をよじり始めた。

私は彼女を無視して、しっかりと躑けてやるつもりで、再び意識を会議に戻した。すると、すでに何分もほとんど聞いていなかったことに気づいた。

幸い相手は話し続けていたので、私の異変には気づいていないはずだ。私は内心で危なかったと思い、相手の話の内容に集中し、頭の中で考え始めた。

そうして一分ほど経った頃、ようやく相手が何を言っているのか理解したのと同時に、田文心が動かなくなっていることに気づいた。

私はびくりとして、彼女を座り殺してしまったのかと焦った。しかしすぐに彼女の胸が上下しているのがわかり、呼吸していることに気づいた。

私は大いに不思議に思い、手を尻の下に伸ばして探った。彼女はなんと私の肛門の下に鼻を押し当て、小さな窪みを作り、裙とパンティ越しにわずかな呼吸の隙間を確保していた。

今彼女が吸っているのは私のパンティで一度濾過された空気だったが、それでも生き延びるには十分だった。

私は内心で苛立った。これでも押さえられないのか？ 私の臀肉が多すぎ、尻が突き出ているせいだ。あんなにしっかり座ったのに、まだ臀裂の間に空気を吸わせてしまうなんて。